

2024 年度 中国現代文学研究者懇話会

中国文学研究会を今日どう見るか

【開催の趣旨】

今年の懇話会では中国文学研究会を取り上げます。中国文学研究会は、日本でも中国でもすでに立派な研究対象になっており、次々と新しい認識が学界にもたらされています。そうした中国文学研究会に関する専門的な研究報告を聞くだけでも十分意味はありそうですが、今回は、「中国文学研究会を今日どう見るか」というテーマで、懇話会参加者同士の認識や意見を率直に交換することによって、中国現代文学研究の主体としてのあり方を考える機会にしたいと思います。というのは、私たちと同じ中国現代文学研究の主体として彼らが時代に刻した足跡は、21 世紀に生きる私たちにも様々に深刻な示唆を与えてくれるからです。

武田泰淳は北海道大学に着任したもののすぐ辞職し、竹内好も 60 年安保を機に都立大学を辞職しました。彼らのそうした出处進退は、現在の私たちがほとんど当然のように、大学等の高等教育機関や学協会等アカデミアの枠内で研究を続けていることの意味——それは結局のところ戦後日本のアカデミアのあり方の意味——をいくらか問いかけているようにも思えます。

また、日本社会において、中国と言えば、まず政治、経済が重要な研究課題とされます。文学・文化も注目されることはありますが、興味本位な取り上げられ方が多く、世間的には、言わばあってもなくてもよいように扱われています。そうした状況下にある点で、彼らと私たちとの間に大差はないように思われます。そんな中で文学研究をすることの社会的な意義はいったい何なのか。この問いは彼らと現在の私たちが共有する核心的な問いではないでしょうか。もちろん、彼らが置かれていた状況と私たちが置かれている状況との間には決定的な違いがありますし、微妙なズレも多々あるはずです。しかし、この道の開拓者であった彼らの試みの中には、中国現代文学研究の意義を根本的に問いただそうとする態度が隔々にまで浸透していたように思われます。この問いに対して彼らはどう考え、いかなる研究を実践し、どのような成果をあげたのか。これは、私たちにとって、非常に興味深い問題ではないでしょうか。

実際、中国文学研究会は、竹内好『魯迅』を生み出したことによって、垂直方向への深化を中国現代文学研究にもたらしたように思えます。一方、彼らは当時すでに、多種多様な文学作品の翻訳を手掛け、清末文学や梅蘭芳、淪陷区文学に論及し、中国の漫画を機関誌に掲載しています。そのような意味で、彼らは、その後現在に至るまでの中国現代文学研究の水平方向への広がりを取っていたとも言えます。

そして何よりも、研究会と言いながら、研究だけではなく、「日支兩國文化の交驛」も

目的とした点は、私たちにとって、非常に示唆深いことだと思います。もちろん、現在の歴史的な高みから眺めれば、彼らにもネガティブな意味での限界や問題が多々あったことはおそらく否定できないでしょう。そうしたことも含めて、当日は、忌憚ない意見交換ができれば誠に幸いです。

【日時】 11月3日（日）※文化の日 14:00 開場

【場所】 東京大学駒場キャンパス 18号館 コラボレーションルーム1

（京王井の頭線・駒場東大前駅下車、徒歩1分。駒場東大前駅までは渋谷駅から各駅停車で2分）

※ 18号館は、正門を入れて正面の建物(1号館)裏に見える、高い建物です。

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/map02_01.html

【プログラム】

14:30～17:30 懇話会「中国文学研究会を今日どう見るか」

総合司会：上原かおり（フェリス女学院大学）

報告：伊藤徳也（東京大学）：日本の中国現代文学研究の起源として

飯塚容（中央大学）：「中国文学研究会」の印象―戦後復興期を中心に

王俊文（成城大学）：『中国文学月報』と『中国』における周氏兄弟言説

18:00～20:00 懇親会（駒場キャンパス 18号館 オープンスペース）

【参加費】 懇話会：1000円

懇親会：学生・院生 2000円／専任教員 5000円／その他の方 3000円

※ 10月20日までに下記のグーグルフォームにてご参加の有無をお知らせください。

<https://docs.google.com/forms/d/10UqxmMjTKrq1kwZNoGjzUPUfgkQeYq8mtaisI7JigYE/edit?pli=1>



※ 大学院生や近隣領域の研究者など、お知り合いの方にもご紹介ください。

※ 当日飛び入りでのご参加も歓迎いたします。

中国現代文学研究者懇話会世話人会

代表 宇野木洋

関東世話人 伊藤徳也 上原かおり 江上幸子

加藤三由紀 白井重範 鈴木将久